

## 平成29年度 地域貢献研究助成費 実績報告書

平成 30 年 3 月 28 日

報告者	学科名	看護学科	職名	准教授	氏名	名越 恵美
研究課題	治療中のがん患者へのケアに関する地域病院看護師の困難感とジレンマ					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	名越 恵美	看護学科・准教授	成人看護学・がん看護学	研究統括・分析・まとめ	
	分担者	山形 真由美 吉田 雄太 津曲 真弥 門倉 康恵	看護学科・助手 保健福祉学研究科院生 保健福祉学研究科院生 松田病院・がん化学療法 認定看護師	在宅看護学 看護学専攻 看護学専攻 がん化学療法	アンケート作成 文献収集・データ入力 文献収集・データ入力 化学療法スーパーバイズ	
研究実績の概要	<p><b>【背景と目的】</b></p> <p>我が国のがん対策の一つにがん医療水準の均てん化があるが、高度治療を受けるためには地理的にがん医療へのアクセスが制限され不利になっている地域は存在する。一方、治療のため入院期間は、平均12日とますます短縮化され、医療処置を必要とする患者は在住地域の病院への転院や在宅療養・外来通院している状況にある。岡山県政の重要課題に「安心して豊かさが実感できる地域の創造」があるが、岡山のがん診療連携拠点病院、地域がん診療連携拠点病院、がん診療推進病院は県南の岡山市、倉敷市に偏っている。</p> <p>さらになんに関連の認定看護師・専門看護師も同様の在籍となり、特に高梁・阿新保健医療圏や東備地区、備後地区ではがん患者専門的なケアを受けにくい状況にあり、看護師もジレンマを感じている。以上のことから、本研究では、治療中がん患者へのケアに関する二次医療圏の地域病院看護師の現状と困難感について明らかにすることを目的とする。本研究により、地域病院における看護師のニーズが明らかとなり施策の一つである「地域医療を支える医療従事者の育成」の基礎資料となると考える。</p> <p><b>【方法】</b></p> <p>対象者：県南東部（備前・和気）・県南西部（総社・笠岡・井原）・高梁阿新（高梁・新見）・津山英田（津山・鏡野）・真庭（真庭・新庄）の地域病院へ勤めている看護師500名。自記式質問用紙によるアンケート調査し郵送法により回収した。</p> <p>調査内容：年齢・性別・看護師歴・職位・がん化学療法または放射線療法の看護歴・所属場所・現病院での経験年数・院外でのがん治療に関する学習会参加の有無・がん治療への不安治療管理体制・がん治療に関する業務内容・活用したい認定看護師または専門看護師、「一般病院における看護師のがん患者ケアに関する困難感尺度」は6段階リッカートスケールを使用。分析は、記述統計とした。また、自由記載については、内容分析を行いカテゴリー化した。</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p><b>【結果】</b> 回収数 276 通、回収率 55.6%であった。各地域ともに半数の回収率であり、地域差は見られなかった。対象者の概要は、平均年齢 44.7±9.9 歳 (21-67)、女性 272 名、男性 4 名。看護師経験 21.68±10.1 年、がん看護経験 10.38±10.55 年であった。がんに関連する学習会参加は 138 名で、半数である。関心はあるものの学習会の機会が少ないことが推察される。看護師の困難感は、看護師の困難感は、コミュニケーション 4.59、自らの知識 4.66、医師の治療や対応 3.85、告知・病状説明 4.04、システム・地域連携 4.70、看取り 3.30 であった。5つの地域は、同じ傾向にあった。また、自由記載は「薬剤の副作用の知識と管理」「疼痛コントロール」「多職種チームの稼働」「退院に向けた家族の協力体制の調整」「患者・家族の悔いのない人生への支援」「緩和医療に関する知識」「患者の QOL を保持」「患者家族の心理支援」「がん拠点病院との連携」「医療者の知識不足」の 10 カテゴリーであった。</p> <p><b>【考察】</b> 副作用を含めたがん化学療法や放射線療法に関する知識のニーズや人生の最終段階にある高齢患者がケアの対象となるため、治療期における緩和ケアやその後を見据えて看取りに関連するニーズが多いと考える。また、がん・高齢者関連のみならず、医師との関係調整や多職種チームの実働に関するニーズがあった。さらに、患者の独居や経済的問題に関する困難感を感じていた。これらのことから、がん緩和ケアや高齢者の看護について学習の機会を設ける必要性が示唆された。がん拠点病院と地域病院が、定期及び必要時に、認定看護師・専門看護師に相談できるようなシステム、メディカルソーシャルワーカーと協働構築が必要である。さらに、病院内で価値観の異なる医師とコメディカルの協力体制がとれるような医療者間の効果的な連携について学ぶ必要がある。一方、患者の家族が介護の負担感を予見し、患者の退院を阻む現状が明らかになった。家族には、社会資源や介護の方法について学ぶ機会を設ける必要性が示唆された。</p> <p>今後は日本看護学会ヘルスプロモーションで発表し、岡山県立大学紀要へ投稿予定である。</p>
<p>成果資料目録</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 名越恵美、門倉康恵：二次医療圏域の地域病院における看護師のがん看護に関する文献研究、第 32 回がん看護学会学術集会、2018 示説発表</li> <li>2. 名越恵美、山形真由美他 3 名：治療中のがん患者へのケアに関する地域病院看護師の困難感とジレンマ、岡山県立大学 OPU フォーラム 2018 示説発表</li> </ol>